◀道から

保育園外観▶

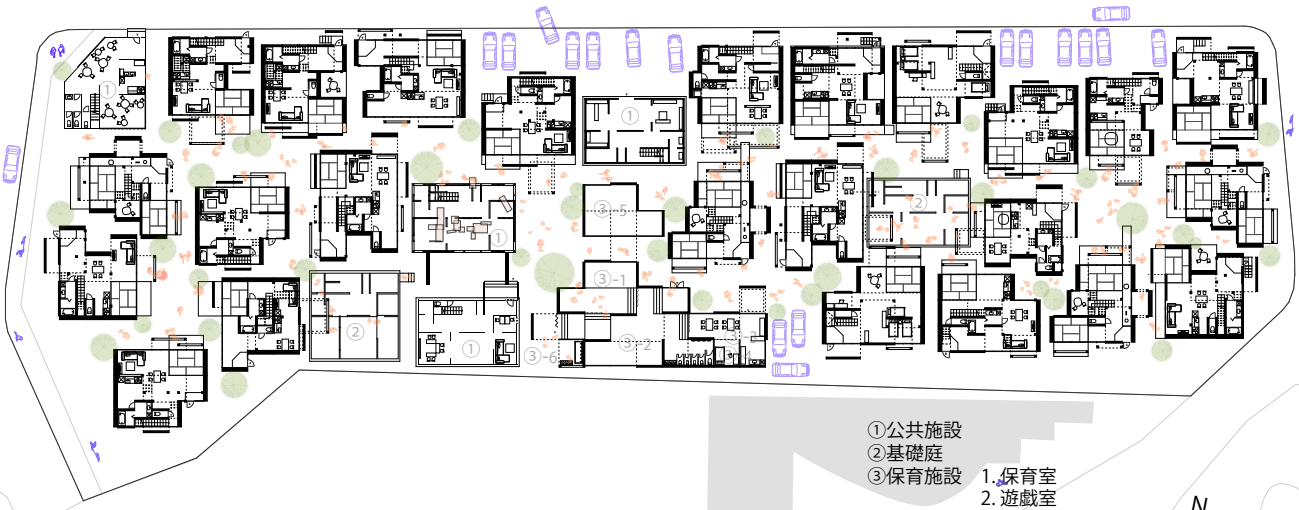
交わり　ー人とのかかわりを織りなすみちー

幼い子どもが生まれて初めてを意思の疎通を図ろうとする相手は、親である。
そして両親をはじめ、同世代の子ども・近所の大人など、様々な人たちと関わりながら成長していくことが望ましい。
しかし、子供を幼いうちから保育園などに預け、働くことが珍しくなくなった現在、
通園時間は親が子どもだけに向き合える数少ない時間として、注目できると思う。
そのような”忙しい親子”のコミュニケーションを触発するような「通園路」となるみちを提案したい。

みちは地域の子どもたちの遊び場であり、
親同士・近隣住民同士、あるいは子どもと近所の大人の交流の場である。

【街区平面図　GL+1500】

敷地は大阪市と京都市のほぼ中間にあるベッドタウンに位置する
戸建ての住宅が高密度に建ち並ぶ住宅街である。
周辺からは公営団地や RC 造の住戸・不規則に曲がった街路など
様々な時代の開発の痕跡を見ることができる。



①公共施設
②基礎庭
③保育施設
1. 保育室
2. 遊戯室
3. 職員室
4. 医務室
5. 多目的ルーム
6. 屋外遊戯場

N

1：800

▲基礎庭

◀学童保育施設

【既存住戸活用】

活用例：学童保育施設
自治会館
図書館
カフェ
基礎庭　など

旧街区からそのまま残る既存の住戸を公共施設として活用する。

みちと街区外をつなぐゲート。
近隣住民がこの街区を訪ねるきっかけを提供するとともに、
街区外からみちへと人々を引き入れる存在となる。

▲住戸のベランダから道を眺める

▲子どもの空間から

▲住戸外観

▲みちから和室をみる

▲寝室3から寝室2をのぞく

【新規住戸　ダイアグラム】

街区内において住戸を建て替える際、新規の住宅は門型のフレームによって構成するものとする。フレームを用いることの、道、住戸内部、街区・住戸の構成に対する意義を下に挙げる。

～道～

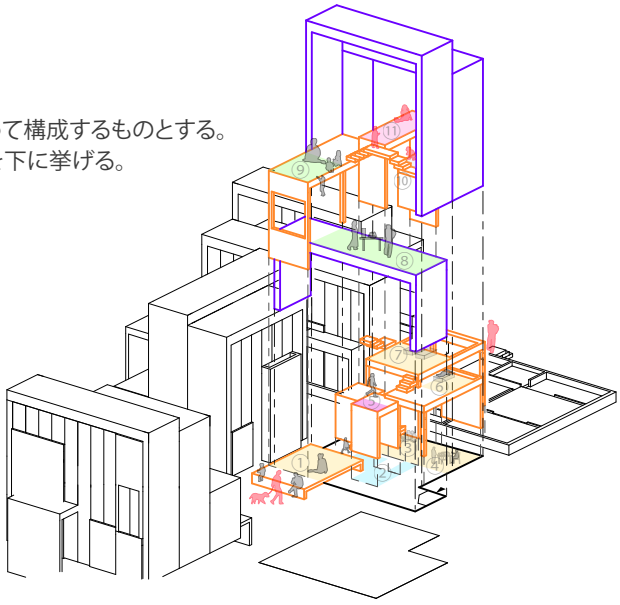
・住戸のプランと連動したフレームが道まで延びることによって、
　歩行者がそこに腰かけたり登ったりして楽しめるようになる。
・様々な高さから伸びたフレームが道で複雑に入り組むことで、
　道の表情が変化していく様が楽しめる。
・フレームが窓口となって、住民同士または住民と歩行者が交流できる場が生まれる。

～住戸内部～

・フレームが各住戸のプランと連動している。
・室を箱とせず、スキップフロアで緩やかに区切られた
　一つの大空間とすることで住戸内の視線の抜けを得る。
・また窓の開閉で十分に風が流れる。

～構成～

・フレーム自体が住戸を支える構造体になっている。
・開口の向きが限定されることで、住民同士の視線のぶつかりを制限できる。



新規住戸の一例

①和室　(GL+600)
②洗面・浴室
③リビング
④キッチン・ダイニング
⑤納戸　(GL+2800)
⑥寝室１　(GL+3000)
⑦寝室２　(GL+3800)
⑧ベランダ　(GL+4600)
⑨ベランダ　(GL+5200)
⑩寝室３　(GL+5600)
⑪子供の部屋　(GL+6400)

街区全体断面パース